
仮面ライダーspirits異聞 X2章

selgey kattvinsky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーspirits異聞 X2章

【Nコード】

N28410

【作者名】

selgey kattivinsky

【あらすじ】

「仮面ライダーspirits」京都一文字ライダー編のアナザ
ー。

京都をモデルにした街のあのアニメのキャラもゲスト出演。

1（前書き）

第2章の続きも書かないで、なぜか京都編のことが頭に膨らんで堪らず投稿してしまいました。

けいおん！！キャラが、この章、ゲスト出演します。あと、オリキヤラいます。どうかご了承のうえで。

何卒御笑覧のほど。

銀閣寺道の交差点の疏水の橋の上でギターケースを担いだ女性が一人立っている。20代前半髪の長い、おそらくは美人と分類される容姿を持った女性である。ほっそりとした、しかし、凛とした雰囲気は細いながらも無駄のないそれでいて充分でしっかりした筋肉が醸し出しているように思われた。

「あれ？ 佐織じゃない？」

女性は声をかけられる。かけた声の主も同じく20代前半の女性。佐織を声をかけられた女性とは違ったタイプであるが、間違いなく彼女も美人の分類に入る。佐織と呼ばれた女性がどこか日本風というか飾り気のない感じの美人だとすれば、声をかけた女性の方はどちらかと言うと華やかな感じのする顔だちをしている。が、容姿全体、凛としているところは二人とも共通していた。

「美穂！ 久しぶり。仕事（でこの辺に来たの）？」

「ううん。ちょっとしたヤボ用」

ほんの一瞬だけ、美穂と呼ばれた女性、霧島美穂の表情が陰った。「なに？ 男？」

意地悪そうに佐織と呼ばれた女性、坂木佐織が霧島美穂にからかうような質問をする。

「そんな色っぽいもんじゃないわよ。」

二人の間の空気感ではそういうことはいつもの事なのだろう。美穂はそんな質問を軽くないなす。

「佐織こそ、誰かと待ち合わせ？」

「うん。……って、ほら令子さんの従妹の女の子。わかる？」

「令子さんって、立花さん？」

「うん。立花姫子ちゃんっていうんだけど。桜高に今通ってて、担任が、聞いてよ、なんと、さわ先輩。」

「えゝ！！ 山中先輩、学校の先生になれたんだ！！」

「で、…笑っちゃうんだけど、おしとやかで優しい先生で評判なんだって！！」

二人ひとしきり大笑いする。本人が聞いていたらドスの利いた声で怒られそうだ。

「サカキさん、待ちました？」

女子高生が立っていた。制服を着てはいるが、少し着崩してどこか大人びた感じがする少女である。

「ああ、姫子ちゃん。こんにちわ。…この子が立花姫子ちゃん。」

「はじめまして。霧島美穂といいます。そう言えば令子先輩にちょっと似ているかもね。」

「はじめまして。立花姫子です。霧島さんも”猛士”なんですか？」

外見、今ドキのギャル風味が少しはあった立花姫子だったが、しゃべり方はそれとは随分違ったしっかりしたものだった。

「ああ、私たち桜高の軽音部でいっしょだったの。令子先輩やさわ先輩の一級下っていうのは前に言ったよね。あと、美穂は堅気の〇し。」

霧島美穂はこの時の坂木佐織による紹介に少し引っかかるものを感じた。私が堅気であるなら自分、坂木は堅気ではないのか？と。そういうえば姫子が言った”猛士”という単語、あれはどういう意味なのだろう？ それを佐織に問いかけようとしたときである。

「あれ？ 姫ちゃんだ」

ととて駆け足で走り寄ってくる女子高生がいた。姫子と同じ制服を着、ギターケースをランドセルみたいに両肩に背負った少女である。見ればその後ろ、4人の少女がいたが、そのうち二人が同じように、といっても、こちらは普通に片方の肩に担いでいるが、ギターケースを持った少女で、あと、キーボードケースを抱えた少女、

そして、学校指定の紺色のスポーツバッグからドラムスティックがのぞいている少女。

「唯。」

姫子が走り寄ってきた少女に声をかける。

「学校の外で会うなんて珍しいね。」

唯と呼ばれた少女は天真爛漫な笑顔を見せた。つられて佐織も美穂も笑みが浮かんでしまう。

「あなたたち、桜高の軽音部なのかしら？」
と、美穂。

「おお、ひさしぶり、またまた名探偵！」

「って唯先輩、紀美さんのときに言ったじゃないですか。制服着てギター持ってたら丸わかりだって」
ギターを持った変形ツインテールの少女が突っ込みを入れる。

「よし、じゃ、今日は後輩諸君におねえさん達がケーキバイキングおごってあげよう！」

佐織は宣言するように言い放つ。

「おお！なんだかわからないけど、おお！！」

唯と呼ばれた少女、平沢唯と、カチューシャをしたドラムスティックを持った少女、田井中律が歓声を上げる。

「その”達”ってなによ、”達”って。私も入ってるわけ？」

美穂が口をとがらせて抗議する。とはいっても、実は美穂自身この界限にいたのは「ヤボ用」で少々ストレスを感じていたので、それをケーキバイキングで紛らわせるためだったのだが。しかし、これだけの人数をおごることは想定していなかった。

「ひょっとして、桜高の先輩ですか？ おごるって…いいんですか？」

心配そうにギターケースを抱えた髪が長く5人の中では背の高い少女が問う。

美穂は、軽く苦笑いした。確かに、ちょっとした出費にはなるのだ

ろうが、もともとストレス解消のためのケーキバイキング。一人で黙々と食べるより大勢でワイワイやる方がいいのかもしれない、と気持ちを切り替える。

「構わないわよ。これでも、天下の外資系企業のOLだから、お金はあるの。」

髪の毛の長い少女に向かって微笑んで見せた。

「姫子ちゃんも軽音部なの？」

銀閣寺道上がったところの喫茶店のテーブルに腰を落ち着けて、美穂は立花姫子に問うたのだが、答えたのは平沢唯だった。

「姫ちゃんはソフトボール部だよ。教室で私と席が隣同士なの。」

「ふうん。そしたら、平沢…唯ちゃんも山中先輩のクラスなんだ？」

「え？ さわちゃんのこと知ってるんですか？」

驚いたように平沢唯が尋ねてくる。その隣に座ったキーボードケースの少女、琴吹紬も興味津津な顔をして霧島美穂の方を見る。美穂は坂木佐織の方を見ながら

「あ、私たちも軽音部だったのよ。山中先輩の一級下。」

立花姫子以外のその場にいた女子高生、再び驚きの声を上げる。

「そういえば、坂木さん、ギターもっておられますよね。何弾いておられるんですか？」

その中では唯一の2年生、ツインテールの中野梓が佐織に問うた。

「あ、見る？」

口にケーキを頬張りもぐもぐしながら、持っていたギターケースを開く。

「おお、フライングV」

ロックギターの定番と言えば定番の内の一つ。

「あれ？ いつから佐織、ギターするようになったの？」

「ああ、これは商売道具。バンドやるときは、ベースね、専ら。」
って、バンドじゃないときにギター弾くって、どんな時？ しかも

商売？ この人プロのミュージシャンなの？ そう思いながら、あれ？ と、霧島美穂、中野梓、そして髪の長い少女秋山澪は佐織のフライングVに違和感を感じた。と、ちらつと見せて、佐織はギターをしまう。

「この中で、ベースは誰やってるの？」

しまいながら、佐織が桜高生に尋ねる。

「あ、私です。」

秋山澪がおずおずと手を挙げた。

「何使ってるの？」

「ジャズベースです。フェンダーの。」

「やっぱりそうなるよねえ。私もベースやるときはそれよ。」

佐織はカラカラ笑った。

「私は、その、レフティーなんですけどね。」

「へえ」。左利き用って割高なのかしら？ フツの右利き用ときつちり正反対なのかしら、鏡にうつしたみたいに、いろいろと。」

「ん、私もよくわからないんですけど、さすがに弦の配置とかはおなじなんじゃないんですか？ あ、でも、人それぞれなのかなあ？」

なぜか、「鏡にうつしたみたいに」というところで、霧島美穂はビクリと反応したが、それに気づく者はいなかった。

「霧島さんは何やってたんですか？」

中野梓が尋ねてきた。

「ギターね。高校のとき使ってたのはグレッチ。大学入ってから、エピフォンのシェラトンと気分によって使い分けてたわ。中野さんは何使ってるの？」

「ムスタングです。」

「ムスタング、ってことは、ジミー・ペイジ？ それとも、カート・コバーン？」

「どっちかというとニルヴァーナの方ですね。」

目をキラキラさせて中野梓は会話に乗ってくる。その横で、平沢唯は、何を言っているのやらちんぷんかんぷんというような顔をしている。音楽をやりながら、確かにこういう話に興味が無いこと言うのはいるものだ。

「平沢さんのギターはどんななの？」

会話を振ってみる。

「私のは、ギー太っていうの！」

「ギーた？」

「あ…、唯のギターはレスポールスタンダードです。唯、あまりそう言うのに興味なくて。」

やはり、そういうコだったか。秋山澪のフォローを聞きながら美穂は思った。それにしても、自分の持ち物に名前付けたがる子っているよね。そうやって愛着を持つことってきつといいことなんだろうな、そう思いながら。

「へえ。王道だね。」

えへへ、と、唯は照れて見せた。

「坂木さんたちも、さわちゃん…山中先生たちみたいなデスメタルやってたんですか？」

カチューシャをした少女。おそらく、この子がドラムだろう。田井中律が尋ねた。

「ううん。私たちは、それこそ、ニルヴァーナみたいなグランジとか、あと、ブランクイーのカヴァーとかよくやってたわ。今は東京にいる木場結花って子がドラムで3ピースだったのよ。私たちの代は3バンドいたから。他にメタルやってた子たちもいたんだけどね。あなたたちはどんな曲やるの？」

「オリジナルだよ。作詞が澪ちゃんんで作曲がむぎちゃんのやつと唯にも参加できるような会話になった。

「へえ」。それはすごいね。一度聴いてみたいな。」

「今度の学園祭、ぜひ聴きにきてください。」

「学園祭もいいけど…」

佐織が何かを言いかける。わ、こいつ何か企んでる。その時、美穂は思った。

「せっかくだし、OGとの交流会やらない？ 桜高の第一音楽室で。さわ先輩たちの代の人とか、声かけられる代の人たち呼んでさ。みんなで思い思いにセッションできたら楽しくない？」

「佐織にしちゃあ、ナイスなアイデアね。」

何を言い出すか内心ビクビクしていた美穂は心からの賛意を伝える。

「それ、いいかもです！」「楽しそう！」

桜高生たちも乗ってきた。

「あ、でも、スケジュールとか合わせるの大変かもね。とりあえず私たちの代だけでも、結花がこっちに帰ってくるタイミング見て連絡するよ。」

店を出た時は、すでに夕闇が迫りつつあった。

「今日はどうもありがとうございました」

立花姫子以外の桜高生たちが声をそろえて挨拶をして去って行った。

「ごめんね、姫子ちゃん。退屈だった？」

佐織が言う。

「全然。私もあの子たちの話聞いているの、面白いから好きなんです。」

「立花さんは、楽器とかしないの？」

美穂が訊いた。姫子は一瞬佐織の方を見て、答えた。

「和太鼓と三味線、みたいなもの、まだ、習いたてですけどね。」

そう答えた。そんなシブい楽器、またなんで、などと訊きたくもなかったが、何となく憚られた。

「そう言えば、佐織と立花さん、なにか用事があるんじゃないの？」

「ああ、うん。今から姫子ちゃんのバイク見に行くのよ。」

なるほど、立花姫子の佇まいにバイクは確かに似合っているように思われた。

「美穂は、SRにまだ乗ってるの？ BSA風の」

「タンクだけはノーマルに戻したわ。元気よ。佐織のSRは？」

「もう、バリバリ！」

バリバリって、あなた、いつの時代のバイク小僧ですか。

「へえ。そしたら、立花さんもSRに乗るの？」

「私は…GBを探してるんです。SRも悪くないけど。」

「いつか、一緒にツーリングにいきましょう。」

「はい！」

佐織たちは夕闇の今出川通りを西へと歩いて行った。楽しい時間であつたが、だからこそ、厭が応にも、美穂は心にのしかかる問題の重さを思い出し憂鬱になった。

その晩のことである。

「もしもし。結花？」

坂木佐織は木場結花に電話をかけた。

「佐織、どうしたの？」

どこか電話の声に元気が無い。

「どうしたの元気ないね。ってそういえば、さっきニュースで視たけど新宿、大変だったみたいじゃない？ 大丈夫だった？」

「とりあえずは…、うん。大丈夫だったよ。全然平気。」

あまり、コンディションが良くないのは確からしい。要件をさつさと伝えることにした。

…

「というわけで、近々京都に戻ってくるものがあつたら、一緒に演
るのはどうか、って、そういう電話。」

『ごめん。今、ちょっと当分先の予定のこと考える余裕ないかな、
って感じなの。』

「そっか。仕方ないよ。また連絡して。」

『うん、わかった。今日はごめんね』

「ううん、こちらこそ。それじゃ、おやすみ」

『おやすみ〜』

何があつたのだろう。声を聞く感じでは健康上の問題ではなさそう
だ。仕事のことだろうか？ 男の事だろうか？ でも、まあ、身体
が健康なら何とかなるだろうと、佐織はあまり心配していなかった。

新宿や、世界中の大都市でバダンのボルテックスが多くの人を攫つ
た晩のことだった。

1（後書き）

「けいおん」の舞台がモロ、京都にいたときの僕の生活圏で、であるから、主人公たちぐらいの娘がいてもおかしくない年齢ですが、ついつい見てしまっていました。なつかしく。

それならば、登場人物たちに京都弁をしゃべらせるべきではあるのでしょうか、生半可なことをするぐらいなら、と、標準語をしゃべらせています。脳内変換していただけたら、それはそれで幸い。

坂木佐織さん。そうです。猛士の角、即ち鬼戦士です。けいおんモブキャラブームの火を付けた立花姫子ちゃんは、立花つながりで今は鬼戦士のサポート役という独自設定。そのうち、軽音部に「甘味処たちばな」のだんごの差し入れに言ってもらう予定です。坂木佐織さんは、イメージとしては、芦名星さん。そう。姫です。その辺の描写もいずれ。

僕が住んでいた当時、銀閣寺道の交差点近くにケーキバイキングをしている喫茶店がありました。今もあるかどうかは分かりません。その向かいにはC B G Bというライブハウスもありました。こちらは今はないようです。

なにはともあれ、書き出しました。第2章や、ひよっとしたら他の章とも同時進行で書いていくことになるかもしれませんが。

城戸真司は、双子の弟、真哉が朝、通勤に出かけるバイクのエンジン音で目が覚めた。

のそりと身体を起こす。カーテンはまだ閉まったままだ。部屋の中はおかげで薄暗い。ベッドから足だけ下ろし、サイドテーブルの上にあるラークの赤い箱の中から一本。赤い箱とは正反対の、しかし色合い毒々しいところはなぜか同じな、105円の安物のライターで火を付けた。口が苦い。しかし

「うめえ……」

などと割と本気にそう思い、口に出して言う。誰も聞いていない。

あの「城戸真司」は、しかし、俺じゃなかった。恐ろしく生々しい夢であつたけれど、しかし、口を衝いて出てくる、あらゆる言葉、行動は自分のもの、自分がするようなものではなかった。

直情的な正義漢。単純莫迦。むしろ、自分の体たらくを省みれば羨ましくすらある。

では鏡の中の「城戸真司」はどうであつたか？ これもまた自分とは明らかに違う。あそこまで悪漢めいてはいないけれど、どこか皮肉な口調ふるまいをするところは、ルックスを含め、弟、真哉に似ている。鏡の城戸は単純莫迦の城戸になり替わりたがっていた。それは、事あるごとに自分を羨ましがり、それがもとで兄弟げんかをよくした、子供の頃の真哉にダブっているように感じられた。事実、子供の頃の真司は、成績優秀、スポーツ万能。社会に出て、あの躰きさえなければ、弟、真哉はずっと真司の陰に隠れた存在だった子供のころを引きずったままだったかもしれない。

今や、小さいながらもIT企業に勤めて、若いながら重要なポストにある真哉には、そんな子供の頃のかけらなど見受けられない。自由で快活な弟。それは子供のころは真司自身の姿であつた。

なんでこんなことになったんだろう？

元より答えは堂堂巡りすることがわかりきっているこの問い。それでもかつては、真剣に悩み、答えを出そうとしていたのだが、いつしか倦怠感の中に埋没してしまっていた。この問いかけも、無意識にただ思っただけ。

あの夢は、俺のどんな願望、心理状態を表しているのだろうか？

確かに、破滅的なあの夢の中の世界では、こんな倦怠感に足をとられる間もないことだろう。しかし、それにしても荒唐無稽すぎないか？ 俺の現実逃避はそんなにひどいものだったのだろうか？

階下に降りるときのかすかな筋肉のきしみが、今朝見たあの夢をあいまって、全盛のときから、随分と筋力が落ちてしまっていることを自覚させた。

「おはよう」

母親に挨拶。

母は最低限の挨拶を返してくる。今更、言葉多く何かを語り合うようなこともない。まして、両親、そして弟の真哉も、真司に対しては腫れものを触る感じである。

朝食は用意してあった。いつものごとく。冷めていた。コンロにのったみそ汁の鍋を温め、ジャーからご飯をよそい、椅子に座り、軽く手を合わせる。

求職中の身として、母にもいい知らせを聞かせてやりたいと思う反面、京都市内に求める職はないのではないか？ いっそ、親元を離れるのも一つの手ではないか、そんなことを考えながら朝食を黙々と食べる。

テレビのワイドショーでは、なにやら延々とSF映画の宣伝をやっているようである。朝から、何やってるんだ？ と思っていたが、

違ったようだ。何やらテロリストが宇宙開発の妨害をしたとか何とか、そういうようなことを放映している。

物騒なことである。

ハローワークに赴くのがこの3カ月ほどの日課である。もはや何のビジョンもない。毎日毎日、自分がパズルのピースのようにうまくはまりこめるところなど、ありはしないのだ、ということを確認しに行くようなものだ。

婚約者が上司と駆け落ちしてしまった、というのが真司の人生の味噌の付き始めだった。失踪した二人が帰ってきてから持たれた話し合いで、要するに自分が彼女の心の自由を奪ってしまっていたのだとなじられたときから、本格的に真司の中の何かが崩れ始めてしまった。

上場企業で将来を嘱望されていたが、以来、鬱にかかり、退職。これではいけないと、何度も再就職の努力をしたが、一度など、鬱が高じて、会社で過呼吸に陥り、気が付いたら病院のベッド、ということもあった。

両親は、見かねて、いつそ、しばらくゆつくり休養に専念してはどうか、とまでいつてくれるが、自分のこの症状は休養を取ったところで好転するとは思われなかった。しかし、行動をしたところでやはりダメなものはダメ。やがて、ハローワークを覗き、帰りにコンビニで求人誌を立ち読みするが、その実、無意識に就職する機など失せてしまっている、というのがルーチンになってしまっていた。

その日は、ハローワークにはいかないことにした。体を鍛えようと思った。幼いころ、剣道、柔道、空手、と片っ端に習った。結構いい線までいけた。いい筋であるとはめられた。しかし、大学、社会に出てから、というものの、身体を鍛えるということをぱたりとやめてしまっていた。

子供番組のヒーローのごとく大立ち回りを演じる夢を見て、ふと、今の自分にはそんなことができるはずもない、それは大変マズい、と、なぜか思い、身体を鍛えるところからやり直してみよう、そう決心したわけである。

自転車で松が崎の運動公園にやってきた。車の免許もバイクの免許も持っているが、車は、婚約時代の思い出が詰まりすぎていてつらいので手放してしまい、そのあとは所有していない。バイクは、大学時代に買ったきりだ。

黙々と、ストレッチをこなし、そのうち子供のころ通った道場に通り、武道を鍛えなおそう、そんなことを考え、久しぶりにほんの少しばかり楽しい気分になりながら、周回コースでゆっくりジョギングをしていた時のことである。ちょうど、駐車場が近くなったところで、

コース脇に立って自分を凝視する男がいた。その男の方を見て、真司も立ち止まる。

「秋山…蓮！」

2（後書き）

夢として自分が仮面ライダーとなって戦っていた記憶を持つ、というのが、この話での平成ライダーたちの基本パターンになっています。でも、ちよつとワンパターンで申し訳ないと思う。他にも何かいい手はないかなあ、とか思いながら…。

そこはかかない倦怠感に包まれているのが常で、かつては自分もそうではなかったはずだ。中学生とか高校生の時は。ただ、どんなに自分なりに努力しても越えられない壁があるように感じてしまったから、心底何かに打ち込むということはなくなってしまったように思う。どうしてそうなったかなど、もう、長いこと考えたこともなかったが、今朝見た夢で、そのきっかけ、越えられないと感じた壁を思い出した。

「城戸真司」。中学生の時、秋山蓮は剣道部のエースだった。校内の立場に胡坐をかくことなく、ひたむきに努力し続けた。しかし、京都市の大会で、2年生の時と3年生の時、いずれも準決勝あたりで、自分よりほんの少しばかり背の低い少年、城戸真司に、コテンパンに打ちのめされた。打倒城戸、と、さんざん努力したにもかかわらず、だ。

秋山の高校は、そこそこの進学校で、城戸に負け続けたことで、剣道に見切りをつけ、学業一色、ガールフレンド、と、ひよつとしたら呼べるような少女はいたが、ことさら深い関係になることもなく、今度は学業に打ち込んだ。努力をしてその成果を得る、具体的には、模試などで名前が出るのが秋山蓮少年にとってのモチベーションだったのだが、またしても、常に、「京都市 城戸真司」が常に彼の100人から200人上のところ居た。いや、もつと言えば、秋山少年が努力して、ほんの少しばかり順位を上げたときなど、城戸少年は、更にその上昇幅を超える成績の上昇を見せていた。またしても、彼の頭には「打倒城戸真司」の文字が浮かんでいたが、3年間、そのモチベーションを保ち続けることは難しかった。別にグレしてしまったとか、そういうことはなかったが、徐々に秋山少年、学業が振るわなくなる。

一浪して、現役の時に志望していた2ランク弱ぐらい下の大学に

入学。燃え尽きてしまったのか、努力せず要領だけで世の中を渡って行こうと、無意識ながら志向するようになってしまっていた。

そして、それなりの努力にはそれなりの結果しか付いてこず、かろうじて就職できたのは、しが無い食品の問屋である。得意先周りのルーチンの商品を積んで回るだけの、緊張感が無く、倦怠感が付いて回るような日常を送っていた。

ところで昨晚の夢である。夢は夢なのだろう。また何というか、荒唐無稽な夢であった。が、その中で深く関わったのが、あの「城戸真司」であった。中学高校と、越えられない目標として、頭には刻みつけてあったが、学校が一緒になった、などの接点は一切ない。したがって、どのような性格をしているかなど知る由もないのだが、名前と顔（中学の時の顔つきから順当に成長したような青年だったが）が一緒なだけの、まさか、こんな性格はしていないだろうな、という、言ってしまうえば単純バカで、最初は夢の中の自分も、少々莫迦にしていた部分があった。が、そのひたむきさに、徐々にペースを握られて…。

どうも、妙に生々しい割には、曖昧な夢で、或いは自分が死に城戸に後の事を託すこともあれば、その逆もあつたりしたような気がする。

ぶっちゃけ、中高生の時は、「城戸真司」は目標を通り越して憎悪の対象と言っていいほどであったのだが、夢の中では、最後には親友のようになったけれど、どちらかが死ぬ、そういう結末だった。

そうか。ヤツは俺にとって一種のトラウマだったのだな、などとひどく納得しながら、いつものように、松が崎の運動公園の駐車場に営業車を止めて、缶コーヒーとキャビンを供にサボっていた。そのように、秋山蓮はあの妙に生々しいようで曖昧な夢を結論付けようとした。それにしても、なぜ、舞台が此処京都ではなく、東京の渋谷界限だったのだろう？と、ふと考えないこともなかったが、ど

うでもいいことだ、そんなことは。

運動公園であるからランニングをする者がいて当然で、その時も若い男が一人、ジョギングをしていた。ご苦労なことだ、と、大したことを思うでもなく、その若い男の顔を見て愕然とした。城戸真司であった。

あの夢の登場人物の中で、現実の生活においては、で、3人、いや、4人、城戸真司は知り合い、或いは友人と呼んでよい人物がいた。北岡秀一、浅倉威、由良吾郎、高見沢逸郎である。夢の中の同名、同じ容姿の人間に一番近いのは、高見沢であるかもしれない。とはいっても、巨大財閥の総帥などとは程遠い、小さなベンチャー企業の代表。弟、真哉の勤める会社の社長である。弟によれば、兄貴肌のところもあるが、基本的に、子供が悪戯を思いつくように新しいアイデアを生み出す人物で、周りの実務的なフォローが無いとやっていけないが、非常にチャーミングな人物であるという。とすれば、夢の中の高見沢とは、やはり違うかもしれない。

夢と同じと言うと、北岡と浅倉がライバルであるという点も、同じと言えば同じかもしれない。が、夢の中のように陰悪なものでは断じてない。城戸真司にとって、北岡と浅倉は大学の法学サークルの2年先輩、由良は同期、ということになる。北岡は泥臭い親分肌で後輩の面倒見がよく、やや理想主義者の帰来がある。夢の中の城戸真司とそう言われれば似ていないことはないが、しかし、あれほど単純莫迦でもない。弁護士を目指し司法試験を何度か受験するものの合格した、という話は聞かない（最近会っていない）。浅倉は現在検察官。寡黙な現実主義者という印象だが、決して冷酷な性格というわけではない。法律の解釈や判例の研究で北岡と浅倉はよく議論で対立した。価値観が正対な二人で、弱者の味方を志す北岡と、犯罪、不法を許さない浅倉は目指すものも違うが、しかし、決

して仲が悪いわけではない。由良は、饒舌で愉快な男だが、こちらは司法試験を一発で合格し、弁護士事務所にインターン中とのことである。

考えてみれば、自分も含め、あの夢の中では、それこそ鏡像のように、それぞれの性格や価値観が正反対であった。

夢の中では一番関わりが深かった青年、秋山蓮。名前までは忘れていたが、中学の時2、3回剣道の試合で対戦した記憶がある。その試合の折に、二言三言、会話は交わしただろうか？ それこそ記憶にないが、秋山も性格とかあの夢と現実では正反対なのだろうか？ そんなことを考えながらジョギングをしていると、本当に秋山蓮本人が目の前に立ち、自分を見ていたのである。

立ち止まった城戸は、とりあえずペコリと目礼をした。

「お久しぶりです。中学の時の試合以来ですね。」

当たり障りのない挨拶。秋山は、城戸も自分の事を覚えていたのか、とは思ったが、いや、と思い直した。自分であれば、自分が試合に勝った相手など覚えているものだろうか？ もっと城戸真司と話したいと思った。

「折角ですので、お時間ありますか？」

秋山の問いかけに、しかし、自分がやろうとしていることを中断することは、鏡の世界の城戸ならともかく、この城戸真司は、最も嫌うことのひとつだった。第一、秋山の身なりからして、秋山自身が仕事の中の最中という感じで、お前、仕事の方はいいいのかよ？ などと突っ込み入れたくなりはしたが、しかしながら、城戸にしても、秋山とは話し合いをしておくべきなのではないか、と直感していた。

「夕方なら時間があります。叡電の修学院駅の向かいにコロラドという喫茶店があります。そこで6時、というのはどうでしょう？」

再会を喜び合うほど、現実の二人は親交が深かったわけではない。またお互い胸を張って語るような近況にあるわけでもない。城戸はぜひと、あの生々しい夢の事を語らずには居られなかった。「実は……」とコーヒーで口を湿らせてから城戸は切りだす。

「申し訳ないが、秋山さんの事は今朝まですっかり忘れていた。顔は覚えていたが、名前なんて忘却の彼方だったんです。」

そう。実のところ、秋山蓮にしたところで、自分の近況を語るつもりもなければ、城戸真司が今何をしているかなどということにもそれほど興味があるわけではなかったのである。だが、まさか、荒唐無稽な夢に城戸が出てきたなどということ話を話すわけにもいかず、だけれど、自分が知りたいのは、他ならぬあの夢の事だった。

「『龍騎』、『ナイト』。他にも、『王蛇』、『ゾルダ』……、秋山さんはこんな名前、聞いたことはありませんか？」

それぞまさしく訊きたいことではあったが、正直城戸の口からこれらの名前を聞いた瞬間、秋山蓮はゾットとした。城戸真司もあの夢を見たということなのか？

「城戸さん、あんたもなのか？」

秋山蓮はそんな言葉を絞り出すのがやっとだった。夢の事を語りたかった城戸真司であるが、秋山蓮のこの反応で、充分だった。恐らくは、秋山にしたところで、城戸本人が見た夢の内容以上のものを見ていないだろうし、知ってはいないだろう。そう確信できる反応だった。急に現実感が失せていく、そんな自分の感覚に城戸真司は苦笑した。現実逃避も極まれり、だなあ、と。しかし、どうやらあれはただの夢、現実生活で生まれたストレスその他を回復させるような機能を持った一般的に言うような「夢」とはどうも明らかに違うのだ、と、この時確信した。

では、あれは、一体何なのだ？ それを知る手掛かりは？ 秋山蓮の方を見る。秋山の方というと、彼もそれなりにショックだったらしく、そこから立ち直っていないように思った。

「秋山さんもでしたか。」

二人は、今朝、お互いに視た夢の内容を語った。ほぼ差異が無い。それぞれの支店で起きたことであることを除いては。そして、夢で視た内容以上の事は、二人とも何も知らなかった。

駆け引きをしているわけでもないのだが、何かそんな感じの奇妙な沈黙に二人は陥る。蓮はコーヒーが開けられたマグカップの持ち手を指でなでた。

「今日のところはとりあえず、ここまででよいですか？ 心当たりをあたって情報を集めてみたいと思います。またお会いしましょう。」

城戸真司は立ち上がる。それにしても、夢の中の城戸真司とは真逆のキャラで、違和感をぬぐえない。莫迦であつたが、あけすけで分かりやすく、不安を感じさせることはなかった夢の中の城戸真司。目の前の現実の城戸真司が、正味、どのような人間なのか、秋山蓮は未だ測りかねていた。

二人で喫茶店を出たところに丁度女子高生の一団が近づいてきた。

「蓮兄ちゃん！」

女子高生の内の一人在声をかけてきた。従妹の秋山漣である。

「あれ、漣ちゃん。学校の帰り？ 何、漣ちゃん、バンドやってんの？」

漣や、その場の他の女子高生を見て蓮は尋ねる。

「蓮さん、ちーす！」

「お、律坊もいたか。久しぶり。」

ボブカットにヒアピンをした少女が漣に尋ねる

「ねえねえ、この人って……」

「うん。私の従兄の蓮さん。」

何やら、秋山蓮は女子高生達と盛り上がっている。城戸真司は、もう、自分が此処にいることはないかと判断した。

「それじゃ、秋山さん、また。」

自転車にまたがり去って行った。

「蓮兄ちゃん、よかったの？」

秋山澪は心配そうに尋ねる。

「ああ、用事は終わったところだ。」

少々後ろ髪を引かれるような感じはあったが、秋山蓮は澪にそう言った。それにしても、と、友人と楽しそうにしている従妹を見て思った。かつては、澪も引つ込み思案のおとなしい子で、友人といえは強引に割り込んでくるように友達になった田井中律ぐらいのもだった。彼女たちが小学生だった頃には何度か遊んでやった時もあったし、中学生の時には勉強を見てやった時もあった。が、澪には律以外に親しい友達はいるのだろうか、と少々心配だったが、今は、こんなにも楽しそうにしている。蓮の顔に笑みが浮かぶ。自分はどうだったか？ 打倒城戸信司に燃えていた自分の中高生時代、それなりに充実はしていたと思うが、友達は、いなかったかもしれない。そして、城戸信司はどうだったのだろうか？ きつと奴も親しい友人というものをもつことはなかったのではないか？ 喫茶店での殷勤無礼さから訳も無くそんな風にもチラツと考えたりもしたが、そのような根拠に乏しい邪推をして俺も結構失礼な奴だな、と苦笑が浮かんだ。

さて、城戸真司である。

どうやら、あの「夢」は只の夢ではないらしい。感触がいつもの夢とは随分違っていたので、それはひどく納得できたのだが、荒唐無稽な内容やら、舞台が東京の渋谷あたりだったりすることやらで、日ごろの自分とはかけ離れすぎている。ただ、友人、知人の北岡秀一、浅倉威、由良吾郎も夢に登場していたのだから、彼らにコンタクトとってみようと思った。そう言えば、と、ふと思いついたが、あの夢の中で、「ライダーバトル」をやめさせるべく、彼らを訪ねて行ったことを思い出したりして、少々苦笑い浮かんだ。もっと

も、夢の中の浅倉は説得などできる人間ではなかったが。

帰宅し、自宅のドアを開けながら、弟の真哉にも、夢の事を訪ねるべきだろうか、と、考えてみたが、それらはすべて必要が無くなつた。真司宛に郵便物が届いていたのである。

3（後書き）

まだ、ライダーに変身しません。結構、のんびりさん。

「修学院駅前の喫茶店コロラド」は実際にそこにあるコロラドさんとは、関係があるようないような。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2841o/>

仮面ライダーspirits異聞 X2章

2010年11月23日05時47分発行